

「レ・ボリューション」

登場人物

ゴロ

リリ

ユキエ

リヨウタ

ミツル

トムラ

トシハル

カナタ

サツコ

ユリ

マユ

草野

野呂

プロローグ

キーボードを前にして（ギターでもよい）音を
並べているマユ。音を詩に乗せていくサツコ。
ハーモニーを付けていくユリ。
それは、あくまでプロローグ。さりげなく客席
の空気に滑り込むように始められる。

「レボリユーション」

風に揺れる麦畑

七色にかかる虹

もう五百マイルも逃れ続けて

君は幻に手を伸ばす

風穴のあいたジーンズ

傷ついて飛べない翼

でもそこに見えている

レボリユーション

それは遠い日のイリユージョン

レボリユーション

だけど消えないイマジネーション

レボリユーション

それは輝きに満ちている

詩の最後の部分にやけにエコーの効いたカラオケ演歌がかぶさる。

「涙でにじんだ街の灯が……」 「裏通り……」 「女の操」など、断片的な、感極まった歌声が「レボリユーション」をかき消していく。

I

繁華街、夜更けの裏通り。酔っ払いのヘドや小便ですえた臭いがする。もう夜明けが近いのだろうか。舞台下手に見える薄汚れた新聞販売店の軒先に、今朝配達される新聞が乱雑に積み上げられている。細い路地をはさんである壁面には、小さな扉がついている。壁側に寄せて置かれたバケツやプランターなどで、ここが花屋の横壁であることがわかる。花屋と新聞販売店の間、奥へ続く人一人通れるかどうかの路地に、うずくまっているゴロとりり。

ゴロ
ウ。 : : : ウオ、ウ、ウウウ。 : : : : : ウオ、ウウウ

りり 何言うてんの。

ゴロ 何や。起きとったんか。

リリ 起きたんや。：：：寒ぶ。

ゴロ あんまり寄るな、うつる。

リリ やらしいな。この寒いのにいてるかいな。：：：

あ、動いた。

ゴロ どこや、ネズミか。

リリ ちがう。おなかの中でや。

ゴロ ウオ：：：ウウウウ：：：。

リリ なあ、今日あたりかもしれない。

ゴロ それ昨日も聞いたで。

リリ そやかて、ホレッ：：：な。お乳かてもう痛い

らいなんや。あんたちやんとそばにおってな。

ゴロ ウオ：：：ウウウウ：：：。

リリ どつか痛いのか。

ゴロ 落ちつくんや。

リリ そや、あんたもここに落ちついたらええ。

ゴロ 気が落ちつくんや、こやって唸ってるとな。お前

もやってみ。ウオ：：：ウウウウ：：。

リリ ウオ：：：ウウウ：：ウ。何か胎教に悪そうや

な。

ゴロ ウオ：：：ウウウウウ：：

リリ なんかわびしいなってきた。

リリ イヤやったらまねせんでええ。

通りの奥から酔っ払い。フラフラとやってくる。
後から追いかけるように女。

女 大丈夫ですか。ちよっと足元ふらついてるみたいで
すけど。

男 ああ、よう飲まされた。ママの話おもしろいからガン
ガン行ってしもた。こんなん久しぶりや。

女 ママはやめて下さい。まだそんな年じゃありません
よ。

男 ああ、サチエちゃん。

女 ユキエです。サチエは本名。

男 ああ、そうかそうか。

ユキエ もう、初めてのお客さんやのに、根掘り葉掘り
聞くから、私ついほんとの名前まで……………。

男 そやけど珍しいな。普通、ガラっとちがう名前で店
出てるのにな。

ユキエ ええ、商売始めたころはそうしてたんですけど、
ホラ、あんまりちがいと自分じゃないみたいで。
男 純情なんやな。

ユキエ そうです。だから流行らへんのですよ、うちの
お店。

男 まあ、これからもちよくちよく寄せてもらおうわ。

ユキエ ええ、ありがとうございます。どうぞごひいきに。今度いらっしゃったときは、私がお客さんのこと根掘り葉掘り聞かせてもらいますわ。あの、差し支えなければお名刺いただけるかしら。

男 ああ、すまん。今切らしてるわ。

ユキエ そうですか。じゃ、また近いうちに。

男 また、明日も来たりしてな。

ユキエ 本当に来てくれたら、私飛び上がって喜びますよ。

男 ハハハハ。こつち行ったら表通り出られるんかいな。ユキエ ええ、この花屋を左に折れたらすぐ大通りですから。

男 へえ、ここ花屋か。ほな明日来るときは、ユキエさんに花束でも用意して来よかな。

ユキエ 期待してます。私そういうのにメッポウ弱いんです。純情ですから。

男 調子ええな。あなたの店も場所良かったら、もうちよつと流行るやろうに。

ユキエ 私一人ですから、あんまり流行りすぎて困りますし、今くらいがちようどいいんです。

男 ほんでも俺一人と差し向かいでは困りもんやな。

ユキエ でも、今夜は楽しかったですわ。

男 ああ、ほなまた来るわ。

ユキエ 明日でしょ。

男 うまいな。来なしゃあないなあ。

ユキエ 待ってます。

男 (ポケットを探り) あ。

ユキエ どうしました。

男 いや、煙草忘れた。

ユキエ すぐ取ってきます。

男 ええわ、そこで買うし。

ユキエ きっとライターもお忘れなんですよ。ライター
質に取られてるからって、明日来てもうても嬉しくあ
りませんから。すぐ取ってきます。

男、メモを出して何か書き込む。新聞店に目を
止め、近付き、中を覗こうとする。

リリ 痛っ。

男 え。

リリ 踏んでる。

男 あ、すんません。どこ踏みました。

ゴロ リリこっち来い。かかわったらあかん。

男 いや、ほんまにすんません。どうもなかったですか。

リリ ゴロ、うち連れていかれる。

ゴロ 堪忍して、堪忍したって。俺ら何にも悪いことし

てへんねん。ちよつとここに座ってただけやから。

男 何や。犬か。損した、犬に謝ってしもた。………
シツシツ、どつか行け。ややこしいところにいてるから、
びっくりするやないか。

ゴロ あの、こいつは身重なんですわ。もうじきヤヤ子
出てきますねん。そやから手荒なまねだけは、どうか
堪忍したって下さい。

男 しつこい奴やな。何もせえへん言うてるやろ。

リリ ゴロ、こいつ誰か連れて行く気や。最近この辺嗅
ぎ回ってる奴や。

男 こら、ほえるな。人が起きてくるやろ。

ゴロ リリ、お前逃げえ。ここは俺が何とかする。

リリ 何とかて、どないするの。

ゴロ (ゴロリと横になり) ウオ………ウウウウウウ。
男 おい、何ちゆう声出すねん。

どこかから聞こえる薄ぼんやりしたドラムの
音、高鳴る

ゴロ ウオ………ウウウウウ………。

男 ほえるな。

リリ ゴロ、こいつお父ちゃんのお葬式に来てたんや。
人にいろいろ聞いてた。こいつ、お父ちゃんが殺され

たんやと思てんねん。

男 (リリに) ……お前、ここの新聞店で飼われつつた犬やな。飼い主おらんようになって、今は野良犬か。ちよつと聞いてええか。

ゴロ ウオ……ウウウウ。

男 やかましい。

リリ ……

男 おい、あのスナックのユキエいう女のどこへ、この死んだ親父よう通とったそうやけど、週に何回くらいや。夕方か、それとも夜中か。

ユキエ お客さん。

男 ああ、ユキエさん。

ユキエ 犬、好きですか。

男 こいつら、愛想ええからかもてたんや。愛想ええ犬は好きや。

ユキエ あの、ライターと煙草、見当たらないようなんですけど、また探します。

男 ああ、そうか。どっか落としたんかもしれんな。ありがとう。ほな行くわ。……ああ、また明日な。ユキエ 明日は店閉めてるかもしれませんよ。

男 へえ、そらまたなんでや。

ユキエ 気が向けば開けるかもしれません。個人経営で気ままですからね。

男　　そうか……。まあ、来てみるわ。この辺の雰囲気
性に合うからな。店開いてなくてもブラついてみるし。
ユキエ　でも寄ってみて下さいね。せっかく開けたのに、
他のお店に行かれたらしゃくですからね。

男　　大丈夫や。こちら辺安いけど、愛想悪い店ばかり
やから浮気はせえへん。

ユキエ　……もしよろしければ、お友だちも誘って来
て下さいな。

男　　ああ、機会があったらな。俺一人で飲むの好きやか
ら、あんまり飲み友だちおらんや。………ほな。
ユキエ　お仕事ご苦労様。

男　　仕事？
ユキエ　ええ。お互い遅くまで。お金稼ぐのは楽じゃあ
りませんね。

ゴロ　　ウオ、ウウウ……。…。
男　　いつまでもほえとけ。(去る)

ユキエ　　(ライターを取り出し煙草に火を点ける)フ
ン、趣味の悪いライター。

ゴロ　　おい、あいつ何者や。
ユキエ　　うちのお店の新しいお客さん。

ゴロ　　それはわかってる。
リリ　　なあ、あいつもお父ちゃんみたいに、これから毎
日あんたの店通うんか。

ユキエ （リリの前に火をかざして）リリ、あんたあいつに何かしやべった？

リリ ああ。あんたがお父ちゃんたらしこんどった、言うたったわ。あいつきつとあんたを連れて行くわ。

ユキエ あんまり興奮するとおなかの子に良くないわよ。

お父ちゃんの子に。

ゴロ お父ちゃんの………て、どういうことや。（二人を見比べて）………リリ。

ユキエ ゴロちゃん。一緒に食事しましょうか。お店においでよ。すぐ用意したげるから。

ゴロ ……リリ。………お前もいこ。

リリ うち、おなか減ってないし。

ゴロ 今減ってなくてもすぐ減るやろ。せっかく誘てくれてんのやし。

リリ 行って来たらええわ。おなか一杯吐くほど食べてきて。うち後であんたのへドでも食べるし。

ユキエ （リリにライターを投げる）

リリ 何のつもり。

ユキエ もう4時前や。朝は冷えるわ。こんな小さい火でもないよりはましでしょ。行きましようか、ゴロちゃん。

ゴロ （行きかけて）リリ、おなかの子俺の子やんな。

リリ ……アホ。

ゴロとユキエ去る。しばし火を見つめるリリ。

男 (下手より出る) おい、焚火でもする気か。

リリ あ、(ライターを隠す) また出て来た。何ウロウロしてんのや。

男 おい。(手を出す)

リリ ……(お手をする)

男 ちがう。ライターや。出せ。

リリ (返す) ユキエの店、もう看板やで。あいつ今、ゴロとご飯食べに行ったわ。

男 ほう、お前。一人留守番か。

リリ 番するもんなんかあらへんわ。あんた何しに戻ってきたんや。

男 地下鉄の始発まだやったからな、何するでもなく向こうの通り入ったらまたここへ戻って来てしもた。まるで迷路や。

リリ そんなん言うて、うちのこと見張りに来たんやろ。

男 おい、ここ、親父死んでから住み込みで新しい奴来たんやろ。どんな奴や。じじいか、若い奴か。

リリ あんた何を嗅ぎ回ってんのや。泥棒に入るつもり

か。それとも捕まえて連れて行くほうなんか。

男 その両方や。盗んで捕まえて、モノにするんや……
……おい、どんな奴や。

リリ ……ジプシーや。

男 ジプシー？

リリ 知らんのか。ここみたいに問題のあった店で、次の店長決まるまで中継ぎする奴や。転々とあちこち回ってる奴や。

男 ははあ、本社派遣の専門員やな。……おい、朝刊やったらもう起きなあかん時刻やろ。遅いな。(中を覗く)

上手から青年出て来る。

リヨウタ あの。

男 (飛びのく)

リヨウタ 何か用ですか。

男 え、いやちょっと新聞わけてもらお思て。……あ
んた、この……

リヨウタ ええ、配達してる者です。新聞やったら駅の売店行って下さい。もうじき開きますから。

リリ リヨウタ、こいつ不審人物や。夜中からずーっとこの辺ウロついてんねん。

男 いや、怪しいものどちがうんです。……昔、この店で世話になっとなったことがあるんですわ。ちよつと懐かしいなって。もうじき大将出てきはるやろなあ
思て……。

リヨウタ あのどういいうご関係の方か知りませんけど、
……大将先週亡くなりましたんで……

男 （大袈裟に驚く）えっ。そらまた何で。

リヨウタ ちよつと急ぎますんで。新しい大将起こさんとあかんですわ。配達遅れたらえらいことですし。
サツコ （急ぎ足で路地から出る。新聞束につまづく。
それを蹴飛ばす）

リヨウタ おう、サツコちゃん。朝から燃えてるな。
サツコ おはよう、早起きロッカー。

リヨウタ やっぱりデビューとなると気合が違うな。練習、今終わるか。

サツコ うん。
リヨウタ 今日昼間俺ら入ってんねん。

サツコ どうしたん、モゾモゾして。

リヨウタ いや、鍵が……（中に向かい）大将、早よ起きんと配達遅れまつせ。

サツコ 私帰るわ。おやすみリヨウちゃん。

リヨウタ おう、ほな。あ……売れても俺のこと、忘れんといてな。

サッコ デビューの前に解散やわ。(上手へ去る)

リヨウタ 何や、つんけんして。………大将！早起きは三文の得、そやから新聞屋はよう道に落ちてる金拾う、言うとったやないですか。今日もどっかで道に落ちとる金、俺らを待ってまつせ！………おかしいなあ。リリ リヨウタ、お父ちゃんのとくと一緒や。どうしよう。

リヨウタ アホなこと言うな。犬の浅知恵でもの言うな。男 (リリに) 何や。ここの大將、朝死んでんの発見されたんか。

リヨウタ あの、新聞あげますからどっか行って下さい。男 いや、俺さつきも言うたとおり、ここの大將に恩あるんですわ。死に方くらい知りたい思うのが人情いうもんですわ。

リリ リヨウタ、嘘や。

リヨウタ (時計を見て) ああ、まずいなあ。山田さん ところ六時前に入っていないと、すぐ電話かけてきよんねんなあ………。

男 事情あんのやったら、チラシ入れくらい手伝いますやん。大将どんな死に方やったんかだけ。

リヨウタ あんたさつきからしつこいなあ。警察呼ぶぞ。男 いや、死に方だけ聞かしてもらたらええんです。あんなたかて、こここの前の大將に世話になったんやろ。俺

もその人に恩がある。言うたら俺とあんた、同じ人から恩受けた者どうし、いわば仲間やな。その仲間がこうして……

リヨウタ ああ、もう、うるさい。……いつもどおり朝来て、ここ開けたら死んでた。それだけや。

男 ……どうやって。

リヨウタ リリ、最近ここに居着いてるあいつは？

リリ 今出てる。

リヨウタ 帰って来たらな、こいつにけしかけたれ。

マユ、路地から出て来る。

マユ リヨウちゃん。

リヨウタ おう、マユちゃん。わるいな、今取り込み中や。

マユ あの、今サッコ通った思うねんけど、どっち行っ
た。

リヨウタ こっち。

マユ ありがとう。

ユリ (路地を出て) マユ、追いかけてええよ。

マユ 何ですよ。楽器の録り明後日やねんで。みんな揃ってなくてどうすんのよ。

ユリ ギター私がやるわ。ボーカル新しい子捜そうや。

マユ （プイとむくれて去ろうとする）

ユリ 嘘ウソ。あの子上着忘れて行ってんねん。サイフ
ここに入ってるからすぐ戻ってくるわ。

男 おい、こんな朝早う若い子ぎょうさん通るけど、奥
に何があんねん。

リョウタ 何やねん。あんた氣い散りまくりやな。

マユ ……：そやけど、こんな寒いところで待つんか。追
いかけようや。どうせ地下鉄のところに居んのわかって
るんやから。

ユリ 私は追いかけたくない。

リョウタ マユちゃん、その髪止めちよつと貸して。

マユ （とつて渡す）どうすんの。

リョウタ （飾りになっている金属部分をグイとねじ曲
げる）

マユ ちよつと何すんのよ。それ高かってんで。

リョウタ 鍵がなくて困ってんねん。買うて返すから。

（鍵穴に差し込む）

マユ あんた、そのラジカルな性格なんとかならんか。

リョウタ 無理やな、ロッカーやからな。

マユ もう。……：ちよつと謝りに行こうや。あんたが
悪いんやから。

ユリ 何で私が謝らなあかんの。あの子のほうから私に
文句つけて来てんで。何で私の音が前へ出過ぎやの。

マユ　　しゃあないやん。スタジオ入んの二時間も遅れてきたんは、あんたなんやから。

ユリ　　それに腹たってるんやったら、そう言うたらええやん。

マユ　　もう………何で私とあんたがケンカせなあかんのよ。

しばしの沈黙。リリ、いつの間にかいなくなっている。

男　　ああ、奥にあるのバンドの練習スタジオか。（リリウタに）あんたもバンドマンか。
リリウタ　くっそー。あかんなあ。

男　　開けたるか。開けたらさっきの話、続き教えてくれるか。

マユ　　どうすんの、待ってんの？

ユリ　　私帰る。

マユ　　何だよ。

ユリ　　だって昼からバイトやし。

マユ　　あんた勝手やな。ほんま、
NEVER KNOWS て、よう付けたもんやわ。何がプロになるよ。ぜんぜん明日見えてけえへん。

男　　バンド名、
TOMORROW NEVER KNOW

O W S = 言うんか。

リヨウタ おい、早よ開けてくれや。

ユリ 誰これ。

リヨウタ 知らん。

男 どういう曲やってんの。オリジナル？

サッコ戻って来る。

サッコ 上着返して、泥棒。(引ったくる)

ユリ 泥棒はあんたやろ。どっかで聞いたような歌詞の
貼り合わせばかり。ライブでは愛想ふりまいてごま
かせてもな、C D 聞いたら一発でバレるわ。

サッコ ああそう。(楽譜をぶちまける) 私やめる。や
ってられへん。

マユ ちよつと。みんな徹夜でスタジオ入って、気い立
ってるんやわ。もうちよつと落ち着いて話そうや。サ
ッコの歌詞ええやん。今度の私、ええと思うで。

ユリ マユ、はっきり言うたったらええわ。詩へタクソ
やから曲付けにくいて。

サッコ あんたなあ、言わせてもらうけど、あんた何や
ってんのよ。作曲マユ、作詞私。あんたへタクソなべ
ースで音はずしくってるだけやんか。はっきり言う
て私、あんたにやめてほしいねん。

ユリ ……私、帰るわ。

サツコ バイバイ。短い間やったけどありがとう。最初のうちは楽しかったわ。

マユ ユリ、今晚十一時から練習やで。今晚一晚しかないねんからな。

ユリ マユ、あんたはホントのところ、このバンドのこ
とどう思てんのよ。

マユ その話、今度にしよ。今は何言うても言い合いに
なるだけやろ。=TOMORROW NEVER K
NOWS=や。明日のことは見えへん分、明日に何か残
しとこうよ。

ユリ あんただけいっつもきれいなんやな。(去る)

男 (楽譜を拾って)「レボリューション」いう歌か、

今時。……これあんたの詩か。

リヨウタ おい、オッサン。早よ開けてくれ。

男 もう開いてんで。

マユ リヨウちゃん、ごめんな。ややこしいところ見せて。
リヨウタ おう、気にすんな、毎度のことや。

マユ うん。……サツコ行くで。

サツコ 先に行つてて。私ちよつとブラブラしてから帰
えるし。

マユ 何でやの。まだどっこも開いてへんで。

サツコ ちよつと頭冷やすわ。今行ったら電車であの子

と一緒にになるやる。私、またやってしまいそうやし。

男 おい、楽譜。(マユに渡す)

マユ ……サツコ。

サツコ (受け取る)

マユ じゃあ、また夜な。リョウちゃん、また明日。

リョウタ おう、がんばってな。

マユ うん、ありがとう。

二人去る。

リョウタ さあ。仕事、仕事。

扉を開ける、カーテンを開ける。と、カウンタ
ーの上、花に囲まれ横たわる男あり。

リョウタ ……マズイ。

男 (目をとめて) 何や、これ。

リョウタ 大将！大将！

男 ……死んでんのか。

リョウタ 大将！起きて下さい。

男 連続変死事件か。おもろなってきた。

リョウタ アホ。息してるわ。(顔を寄せて) ウワツ、
酒くさ。

ミツル （店の奥から出てくる）おはよう、リョウタ君。今朝も寒いな。もう一枚ようけ着てこよ。（と、引っ込みかける）

リョウタ ミツル君、これどういうことや。何で大将こんなところで。

ミツル （気付いて）ああ、トムさん、またこんなところで。トムさん、トムさん。

リョウタ またて。大将こんなところでよう寝はんのか。

ミツル いや、この店来てからなんや。前までの店では、飲んでもすぐ帰って来てたのに、こっち来てからは、どうも夜中に帰ってるみたいなんや。昨日、一昨日もボク、夜中にトイレ起きたらここで寝てはって。

リョウタ しょうがないなあ。この辺だいたい店早よ閉まんのになあ。

ミツル ボクいっつも早よ寝るから、よう知らんのやけど。何か、その跡地の奥の店で飲んでるらしいで。

男 ちょっと待ってくれ。路地の奥いうたら一軒しかないやろ。俺そのスナックでさっきまで飲んどったけど、この人は来てなかったで。

ミツル ああ、あんた、前の店長の甥子さん。ボク、このトムラさんについてあちこちの店回ってます。ミツルて呼んで下さい。

男 ああ、いえ、ちがうんです。

ミツル リヨウタ君。案外マトモそうやんか。

リヨウタ こいつはちがうねん。

男 私あの……野呂という者です。前にここで世話になつてたことが。

リヨウタ ミツル君、とにかく大将起こして、カウンタ
ー空けんと仕事できへん。

ミツル トムさん、起きて下さい。ここ空けんと仕事に
ならんのですわ。トムさん。トムさん。

野呂 あの……トムさんという呼び名は、何でトムさ
ん？

リヨウタ (新聞を渡す) ほい、チラシ入れ手伝つてく
れるんやろ。

ミツル 名字がトムラさん。だからトムさん。

トムラ (むっくり起き上がり、咳きこむ)

リヨウタ 大将、やっと目覚めましたか。ちよつと急が
んとマズイですよ。

トムラ ……そうか、困つたな。ボク、よう寝てたな。
まあ、ボチボチ急がんとな。リヨウタ君、ちよつと急

いで新聞中へ入れてんか。

リヨウタ はい。大将、俺の区域、朝早い人多いんです
わ。もうちよつと早よ起きてもらわんと……。

トムラ (取り合わず) ああ、まあ、急ぎ過ぎると事故
するからな。ボチボチ急いで、落ち着いていこ。ミツ

ル、トムさん、最近飲み過ぎですわ。こんなん続くと、信用なくなりますよ。

トムラ (チラシを揃えながら) リョウタ君、この子誰？ボクこんな子、雇ったかな。

ミツル トムさん、真面目にやりましょ。

リョウタ 大将、何のボケか知りませんが、そらミツル君から文句も出ますよ。当然です。……おい、あなた、ここに昔いてたわりにはヘククソやな。新聞は、こう置くんや。ほんでこつちからチラシを……

トムラ 今日トシハルはどうしたんや。姿が見えへんようやけど。

ミツル ……前の店長の甥子さんやったら、四時に来てくれるように電話で言うとききましたからもう来る思いますわ。まあ、知的ハンデのある入らしいから、その分歩みも遅いんちがいます。

トムラ 前の……店長で、どういふことかな。君、よう説明してもらえへんかな。

リョウタ ……ちよつとミツル君。(外へ呼ぶ)

トムラ リョウタ君。君、忙しい時に手休めたら、どんな時間急いてくるよ。

リョウタ はい、ちよつと。……その分その男がやりますんで。

ミツル ……リョウタ君、トムさんおかしいわ。どつ

か打ったんやろか。

リヨウタ 俺思うねんけどな、ミツル君。あのフニヤけたしやべり方な、あれ、前の店長の村中さんにソックリや。

ミツル 気色悪いこと言うなよ。そういう夏向きの話はこういう寒い朝にするもんとちがう。

リヨウタ それに……ほれ、あのチラシの入れ方見てみ。村中さんの入れ方や。ちよっと小指立ってるやろ。

ミツル ……トムさん、そういうたらいつもは左からチラシ入れるわ。

野呂 (いつの間にかそばにいる) おや。どないしたんや。

リヨウタ あんたは関係ないやろ。チラシ入れ手伝うといてえや。

野呂 前の店長がどうしたて？

ミツル いや、トムさんにとりついてるらしいんですわ。リヨウタ 気色悪い言い方すんなよ。

ミツル 言い出したんは、リヨウタ君やろ。

野呂 えっと……前の店長の名前、何言うたかな。ド忘れしてしもて。

リヨウタ 村中さんや。

野呂 (トムラに近寄り) やあ、村中さん。ご無沙汰し

てます。

トムラ：：：：。

野呂 覚えてはりませんか。野呂ですわ。ほれ、もう十年も前になりますかね、ここに住み込ましてもろて、奨学金で大学行かしてもうてた：：：

トムラ：：：：

野呂 大将もお元気そうで何よりです。

リョウタ （小声で）アホ、もう死んどるわ。

トムラ 君、今は何してるの。

野呂 は？

トムラ 何して暮らし立ててるの。

野呂 まあ、いろいろ。：：：たまに新聞屋とかもやっています。

トムラ 君、嘘ついたらあかんよ。手見たらわかる。その白魚のような手は、新聞配達してる者の手とちがうよ。

野呂 ：：：後、他に：：：ライターとか。

トムラ そんな物売り歩いてんのか。それでは安定せんな。

野呂 いえ、作家ですわ。

トムラ ほう、君は学生の時分から何か光るところがあると思とったけど、そんなもんなったか。

野呂 ええ、売れませんが。

トムラ それではあかんな。またウチで仕事するか、昔
みたいに。

野呂 はあ………（二人の所へ戻ろうとする）

トムラ どないしたんや。

野呂 ……ちよつと。

リョウタ な、あれ村中さんやろ。

ミツル トムさんでないことは確かや。

野呂 怪しいなあ。どうもツジツマがあわん。

ミツル そやろ。何でトムさんあんなったか、思い当た
る節がないもんなあ。

野呂 前の店長て、そのトムさんは面識あったんか。

リョウタ おい、大将こつち見てんで。

野呂 村中さん、ちよつとこの子らと配達順序の確認し
てますんで。すぐ戻ります。

ミツル ……：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…
ここに居てたことあるとか言うてたなあ。

野呂 いつ頃や。

ミツル さあ、そこまでは………。

野呂 何かあるなあ。

リョウタ 何かて、何や。

野呂 いや、俺が昔ここに居てたいうのは嘘なんや。カ
マかけたら何か出てくるか思て言うたんやけど、そし
たら、あいつ俺がおったの覚えてるように言いよった。

トムラ、いつの間にか新聞を入れる方向が変わっている。

トムラ おい、ミツル。お前何してんねん。もうこんな時間やないか。そんなところでサボってる場合ちがうやろ。早よこつち来てチャツチャと仕事せんかい。

ミツル ああ、トムさんや。おい、リョウタ君、トムさんがトムさんに戻ったぞ。

トムラ (新聞で頭をたたく) 何訳のわからんこと言うとのんや。リョウタ君、君も何をミツルとゴチャゴチしゃべってんのや。ちゃんと仕事せんと、前の大将心配して成仏できへんがな。

リョウタ えっ？今のそういう意味やったんですか。

トムラ 今ので何や。

リョウタ いや、あの……。

ミツル トムさん、夕べどこで飲んであったんですか。

またこの上で寝てはって難儀したんですよ。

トムラ おう、そうか。すまん。

ミツル すまんではすみませんわ。

トムラ うるさい。早よ手動かせ。俺がどこで飲もうと勝手や。

リョウタ 大将。ホンマに今の覚えてはらへんのですか。

トムラ　今ので何や。……（野呂に）おい、その人、あんた誰や。

野呂　は？いや、ひよんなことから手伝うことになってしもて。

トムラ　ちよっと待ちいな。ひよんなことで手伝われたら困るがな。ひよんなことで仕事に着けたら世界中の失業問題解決や。おい、この人に手伝わせたん誰や。リョウタ君か、ミツルか。

ミツル　いや、元はと言えばトムさんが。

下ムラ　人のせいにするな。お前が手伝わせてんのか。おい、手止まってる。チラシ入れながらも言え。何年俺が仕込んだったと思てんねん。

野呂　あの、私作家をやってまして、それでまあ、取材を兼ねて手伝わせてもろてるような次第で。

トムラ　作家？

野呂　はい。

リョウタ　今度はホンマか。その作家いうのは。

トムラ　リョウタ君、しっかり手動かして。大将の供養やと思て真面目にやり。

リョウタ　オス。

トムラ　で、あんた。作家でもサッカーの選手でもええんやけどな、とにかく俺通してもらわんと。若い者では判断でけへんことやからな、そういうことは。まあ、

俺も若いけど。

リョウタ 大将、ほな遅れるとまずいところありますんで、チラシ入れ中途ですけど、出ますわ。

トムラ おい、リョウタ君。そら遅れたらあかんけどやな、途中でチラシ置いといて後、誰がすんねん。

リョウタ はあ、一旦戻ってからやりますわ。

トムラ それでは後が間に合わんやろ。

野呂 あ、俺やつといたろか。

トムラ あんたは手伝わされへん。まだ雇うと決まったわけやないんやからな。

リョウタ じゃあ、今やりますわ。

トムラ ええわ、早よ行ってこいや。俺がやつといたらええんやろ。俺は頼むんやったら頼むて、ちゃんと言うて行けいうことを言うてんのや。

リョウタ すんません。御願いします。

トムラ はい、気をつけて。

野呂 (ミツルに) なあ、ここは自転車とか単車とか使わへんのか。

ミツル ああ、この区域はテナントビルとマンションばかりやからな、そんなん使てたら、余計時間かかるんや。

トムラ ミツルー。まだか。早よせえ。

ミツル はい、もう行けます。

トムラ 新聞いうたらな、新しく聞くから新聞言うんや。
遅れたら新聞紙になっちゃってしまふ。これ、もう耳にタコ
できてるな。

ミツル はい、ほな行って来ます。

トムラ おい、靴のヒモほどけてる。ちゃんとせんかい。
お前途中でひっくりかえって頭カチ割って死んでもや
なあ、保険降りて父ちゃん母ちゃん金持ちになるだけ
や。親孝行はちゃんと自分で稼いでせえ。

ミツル はい、気いつけて行って来ます。

トムラ あんた、ほんでここで仕事したいの。

野呂 いや……はあ。

トムラ 新聞屋いうたらしんどいで。生半可な気持ちで
は勤まらへん。雨の日も風の日も、二日酔いでも、カ
ゼひいても休まれへん。途中でケツ割んのやったら、
やめといて。

野呂 あの……店長は配達しはらへんのですか。

トムラ 店長……俺か？

野呂 はあ。

トムラ するがな、俺かてちゃんと自分の体で稼いでる
がな。そやけど俺はこの仕切りで入ってるわけやろ。
若い者みんな出して、それから出かける訳や。そうい
うわけで住宅関係は、みんなあいつらに任せて、俺は
十時までに入れたらええテナントを回るわけや。

野呂　　はあ、うまいことなってますねえ。

トムラ　感心してる場合やあれへん。どないすんねん。

野呂　　ええ………まあ、そしたら。

トムラ　　そういう煮え切らん言い方では、俺も、…はい、
どうぞ…とは言われへん。わかるやろ。

花屋の横壁の扉が開き、女が出て来る。

カナタ　おはようトムさん。新聞下さいな。

トムラ　　ああ、今持って行こ、思とったとこやのに。はい。
（渡す）すんませんな、いつも取りに来てもらて。

カナタ　　いや、前の村中さんのときからそうしてました
から、気にせんといて下さい。………今朝は起きられ
れました？

トムラ　　え、もうバツチリ。前の晩にええ事あると、朝
も気合がちがいますわ。ハハハハ。

カナタ　　私、心配してたんですよ。早起きの仕事でしょ。
そやのに………（野呂に目を止めて）あの、そちらの
方は………

トムラ　　ああ、うちの見習いですわ。

カナタ　　ああ、そうですか。おはようございます。大変
ですなえ。

野呂　　はあ、どうも。花屋の方ですか。

カナタ ええ。あの、どこかでお会いしたことありません？

野呂 えっ？いや、ボク今日初めてですわ。

カナタ そう………。

トムラ あの、そしたらカナタさん、ボクそろそろ配達出ますんで。よかったらゆつくりしてつて下さい。

カナタ ご苦労様。がんばってくださいね。

トムラ はい、行って来ます。おい、あんた。ちよっと店番してて。前の店長の甥が今日からなんや。俺、一時間ほどで戻るから、ちよっと待たしといてくれ。あんた雇うかどうかは、また後でゆつくり話しよう。

カナタ トシハル君、来てないんですか。

トムラ ええ、どうしたんですかねえ。ボクも心配してるんですわ。

ゴロ戻って来る。

ゴロ (満腹という風情、が)おい、カナちゃん、リリどこ行っただんや。知らんか。

カナタ さあ、今朝は私見てないけど。(トムラに)ねえ。

トムラ こら、犬がえらそうにカナちゃんて、どういふことや。

ゴロ　　：　　：　　：　　ふん。これでも、あんたよりはちよつとば
つか付き合い長いねん。カナちゃん、知らんかなあ。
さつきまでここに居てたはずなんやけど。

野呂　　おい、犬。

ゴロ　　あつ、お前さつきの。おのれ、リリに何したんや。

野呂　　人聞きの悪いこと言うなよ。

トムラ　何や、あんたこの汚い犬と知り合いか。

野呂　　いや、そういうわけやないんですけど。

ゴロ　　おい、トムさん。こいつ氣いつけた方がええぞ。

何かようないことたくらんどる。

トムラ　氣安う人のことトムさん言うな、犬が。俺は犬
は嫌いなんや。そやけどもう一匹が、前の店長に飼わ
れとったいうことで、大目に見たってんねん。あんま
りなめた口きくといてまうぞ。

ゴロ　　：　　：　　：　　堪忍。

トムラ　よし。ほなおとなしゆうしとけ。犬は犬らしく、
人は人らしくや。ほなカナタさん、行って来ます。

（去る）

カナタ　氣いつけて。

ゴロ　　（野呂に）お前、リリどこ連れて行ったんや。

野呂　　さあな、お前みたいなんが嫌になって、家出した
んとちゃうか。

ゴロ　　何やて、家出？

カナタ もう、あんまりいじめんといたって下さい。ゴロちゃん、もうじき帰ってくるよ。心配せんでええよ。ゴロ 俺、探しに行ってくるわ。せっかくぬくぬくのゆで卵もろて来たのに、冷めんうちに食べさしたらんと。カナタ 戻ってきたら待つように言うところか。

ゴロ おう、頼むわカナちゃん。(野呂に) お前、リリに何かしたら承知せんからな。

野呂 おい、犬。あんまり女大事にし過ぎるとなめられるぞ。

ゴロ うるさいわ。お前に何がわかんねん。(去る)

ゴロが去ったことで野呂と女の間になんたなく遠慮がちな空気。

カナタ ……あなた、本当にどっかでお会いしたことありません？

野呂 いや…俺、会ってたら絶対忘れませんわ、あんたみたいなベツピンさん。

カナタ あら、ヘタクソなお上手。

野呂 ……今、花は何がいいんですかね。

カナタ はっ？

野呂 いや、季節の花というのがありますやろ。

カナタ そうやね……あなたはどんな花が好き？

野呂 俺ですか。……まあ、何でも。だいたい花は好きです。

カナタ まあ、そうやね。それぞれの花の綺麗さがあるからね。花はみんな綺麗。……あの、新聞屋さんて、お昼間時間空くんでしょ。よかったら花、見に来て下さいな。

野呂 あの………この大将、トムラさん。夕べあんたと飲んでたんですか。

カナタ ええ、そうですけど。………何でそんなこと聞かはるんです。

野呂 今朝、あの人カウンターの上で寝てて、大変やっただんですわ。

カナタ ええ、また？（笑う）

野呂 それに、おかしなこともあった。

カナタ 村中さんの口調でしゃべってはったんですよ。

野呂 そうなんですわ。何で知ってはるんですか。

カナタ だって夕べもそうやったんですよ。まるで、トムラさんと私と、村中さんとで飲んでるみたいになぎやかで。きっと今朝はその続きやったんですよ。

野呂（考えこんで）………ちよつと、お茶でも行きませんか。その話よう聞かせて下さい。

カナタ まだどこも開けてないでしょ。………あなた、ここに何しに来たんです？

リリ（上手より出る）トシハル！こっちや、こっち。
道忘れたんか。そんなんやから。アホ言われんねん
で。早よこっちおいで！

トシハルと呼ばれる青年、何故か路地から出る。

トシハル（新聞を手に抱えて）シンブーン、シンブー
ン、チヨウカンです。オハヨウゴザイマス。

リリ トシハル、せっかくみんなが配った分、持って来
たらあかんやんか。またみんなに怒られんで。

トシハル シンブーン、オハヨウゴザイマス。（カナタ
に渡す）

カナタ ご苦労さん。ひさしぶりやね、トシ君。

トシハル シンブーン、チヨウカンです。（野呂に渡
す）

野呂（圧倒され）あ、ありがとう。

トシハル ゴク로우サン。ゴク로우サン。

カナタ ありがとうやったらあかんのよ。ご苦労さんて
言わんと。

野呂 ああ、ご。苦労さん。

トシハル 今日暑なりそうですなあ。（カナタに）カ
ブト虫！（と、石鹼箱を見せる）

カナタ おおきいなあ。ちゃんとつかまえとかんと飛ん

で行くで。

トシハル　リリ、リリ。オッチャン、オッチャンはいたつか。

リリ　そや、配達や。遠いところまで配達行ったからな、今は代わりの人が来てんねん。そやからトシハル、オッチャンのときよりちやんとすんねんで。

トシハル　（野呂に）カブト虫！（と、カウンターの上に置く）

野呂　（手にとって眺める）何入ってんのや。（開けようとする）

トシハル、カブくでひったくる。野呂の手に引っ掻き傷。

野呂　イタツ。何すんねん。痛いやないか。

カナタ　トシ君、その人はカブト虫取り上げようとしたんとちがうんやで。

リリ　あんた、まだおったんか。今度は新聞屋のまね事して何のつもりや。

カナタ　リリ、ゴロちゃん探してたよ。ゆで卵ぬくいうちにあげるんや言うて。

リリ　あ、そう。……妊婦はな、あんまり卵食べたらかあかのや。子供がアトピー性皮膚炎になったら、か

わいそうやからな。

カナタ あんた、トシ君迎えに行ってたんか。

リリ そや。遠いところでトシハルの、ニブーンブーンニ言う声がしたんや。ほんで心配やから迎えに行ってたん。

トシハル、さきほどから石鹼箱を地面にはわせていたが、突然カナタのスカートの中へもぐりこませる。

カナタ トシ君、そんなことしたらあかんよ。カブト虫は外のほうが好きや言うてる。

トシハル ちがう。カブト虫は暗いところ好きなんや。

トムラ戻って来る。

トムラ トシハル、遅かったやないか。オツチャンしびれ切らして待ってたんやで。

トシハル (一瞬目を向けるが)カブト虫……羽根広げた……カブト虫(飛んでいる様子)

カナタ (カブト虫が胸に止まる)トシ君、オツチャン仕事や言うてはるで。

トシハル オツチャン。オツチャンいてへん。

トムラ すんませんな、カナちゃん。いつも面倒見ても

ろて。トシハル、これ持って早よ配達行ってこい。いつものところ入れたらええんや。わかってるな。

トシハル　リリ、リリ。オツチャン、オツチャンちがう。リリ　（トムラの臭いを嗅ぐ）トムさん、そんなんいうてもトシハル手なづけられへんで。ちゃんと自分が新

しい大将や言わんと、いつまでたってもわかれへん。

トムラ　リリ、朝飯まだやったな。すぐこさえたるから、奥のコタツのとき。メシちゃんと食べへんかったら、ええ子産まれへん。

リリ　∴∴∴

トムラ　何ちゆう目えして人のこと見んねんな。早よこっち来い。

リリ　トムさん、何のまねや。

トムラ　何やリリ。マタニテーブルいうやつか。何もボクに氣い立てることあれへんがな。

リリ　（無視して）トシハル、配達行こか。間違えるとあかんからうち付いて行つたるわ。

トシハル　うん。カブト虫着陸。

トムラ　トシハル、カブト虫置いて行き。両手空いてんと配達できひんやろ。途中でカブト虫逃がしてしもたらはりあいないな。

リリ　トシハル行こ。

トシハル　（石鹼箱をカナタに差し出し、新聞束を抱え）

シンブーン。チヨウカンです。（カナタに渡す）
カナタ　ご苦労さん。さっきもろたから、次配りに行っ
といで。

トシハル　（野呂に）シンブーン、オハヨウゴザイマ
ス。

野呂　ご苦労なこっちゃ。

トシハル　きょうもあつなりそうですね。

リリ　トシハル、行くで。

トシハル　シンブーン、シンブーン、チヨウカンです。

シンブーン、オハヨウゴザイマス。

リリ　トシハルこっちゃで。

リリ、トシハル遠ざかる。

トムラ奥の部屋へ入る。

野呂　あの、カナタさん………

カナタ　はい。

野呂　今のは、トムラさんですよ。

カナタ　いいえ、村中さんでしょ。私はシンさんて呼ん
でますけど。

野呂　あの、こういう言い方でいいかどうかわかりませ
んけど、いわゆる多重人格いうことですか。あのトム
ラさんという人は。

カナタ どうなんでしょう。どっちでも構わないんところがいます。

野呂 いや、夕べ三人で話してるようやったていうのは、
……僕、今朝から目撃したんですけど、交互にトム
ラさん、つまり今の大将と、亡くなった前の大将の村
中さんが出てきた、いう事ですか。

カナタ そういうことですね。楽しいんところがいます。
一人で二人やなんて。

野呂 普通そういうの、病氣言うんところがいますかね。
まさかトムラさんがイタコになってるわけでもあるま
いし。

カナタ そんな常識に過ぎへんでしょう。

野呂 えっ？

カナタ 病氣なんて人が名付けたもんでしょ。

トムラ、出て来て店先に水をまく

カナタ シンさん、いい朝ですね。

トムラ ほんまやな。今日もよう晴れそうや。もうじき
したら、すぐに春やな。

カナタ そしたらまた麦に花が咲きますね。

トムラ ああ、今から待ち遠しいなあ。

野呂 あの、村中さん。

トムラ ああ、君、まだそんなところで手伝いしてくれて
たんかいな。

野呂 ボクさつき昔ここで世話になってた言いましたけ
ど、実はあれ嘘なんですわ。何で話合わせはったん
で
すか。

トムラ 何でさつきが昔やねんな。君、おもしろいな。

野呂 いや、そういうこととちごて……。

トムラ 水くさいなあ、君のこと忘れるわけあれへん。

野呂 いや、ボクほんまに村中さんと会うの、初めてな
んです。

トムラ そんなに言うんやったらいつペン奥おいで。写
真見せたげるわ。まだ君が十二、三の時かな、正月に
ほれ、綺麗な恰好してみんなと写真撮ったやろ。あれ、
出したげるから、早よ、奥おいで。

野呂 ああ、じゃあお邪魔します。

トムラ 水くさいなあ。いつからそんな水くさなつたん
や。自分の家のようにしたらええやんか。

カナタ じゃあシンさん、また。

トムラ ああ、バイバイ。

ユキエ (トムラが奥へ引つ込むのをうかがって)へえ、
えらいおもしろいことになってんねんな。

カナタ ああ、ユキエさん。

ユキエ タベはあの新しい店長、来えへんなあ思ってたら、

あんたと仲良うなってたんか。何でうちのお客、全部あんたが取っていくのかなあ。

カナタ それ、シンさんのこと？

ユキエ ……あんた、あの人にもアレやらししたんか。

カナタ そうや。ちよつと話したらすごい興味持つてくれはって。

ユキエ ええけど、面倒はごめんやで。あんたいらんことしやべったんとちがうか。あの新しい店長からバレル、いうことないやろな。

カナタ 何がそんなに怖いの。私とあんたでシンさんのお葬式出したこと？

ユキエ 別にそういうわけとちやうよ。シンさんの体はボイラー室で灰にしたんやからな。どこにも証拠ないわけやし。

カナタ (石 罫箱を見せて) これ、何やと思う？

ユキエ 何、石 罫箱やろ。

カナタ これトシ君の持ち歩いてるカブト虫なんや。

ユキエ ああ、あの頭の弱い子がそう言うてんの。

カナタ (開ける) ホラッ。

ユキエ 何これ。……骨？

カナタ シンさんのノドボトケ。シンさんおらんようになって心細いやろう思て、トシ君にお守りや言うて渡してあんねん。すごく大事にしてる

ユキエ あんた、あれからこれ拾いに、あのお風呂屋に戻ったんか。

カナタ そうや。トシ君に会いにな。それでこれ、渡してあげたんや。

ユキエ あの子、私らがシンさん死んだことと関係あるの知ってんのちやうやろね。

カナタ トシ君にはシンさんが死んだいうこともわかれへんよ。人が死ぬいう考えがないねん。

ユキエ ……そう。

カナタ 私、トシ君の面倒見よかなあ思てんねん。あの子さえ良ければ、家に住んでもらおかなって。朝の新聞配達は楽しそうやからいいにしても、夜のポイラーの番はかわいそうや。あのお風呂屋の夫婦、何かにつけてトシ君にきつく当たるし。

ユキエ それがシンさん引っ張りこんだことへの罪ほろぼし？ 物好きやな、あんた。

カナタ 私はシンさんは幸せになったんやと思ってる。「レポリション」は人を幸せに導いてくれるんや。その証拠にシンさんは、あのおトムラさんの中で幸せに生きてるもん。

ユキエ あの薬、そんな力があるの？

カナタ 別にシンさんが戻って来たわけやないよ。元々トムラさんの中にいてはった。それが表に出てきたい

うこと。

ユキエ どういうこと。

カナタ 今度ゆっくり聞いてみたら？ また、あなたの店にも飲みに行きはるんやろ。そのときにでも。

ユキエ ……。なあ、今奥へ入って行った男、あいつ気いつけたほうがええよ。あいつ夕べうちの店来て、この辺のこと根掘り葉掘り聞いて行ったんや。刑事ではなさそうやけど、あんたも余計なことしゃべらんほうがええ。

カナタ あの人……私、会ったことあるような気がするんやけど。

ユキエ あいつホラッ、シンさんのお葬式に来てたやんか。棺桶のフタ閉めたままやったことにえらい興味もつてた。

カナタ ああ、そうか、それで。

ユキエ あんたは頭の中までお花畑やな。もうちよっと神経尖らせとかんとマズイことになるで。私、あなたのとばっちりで捕まるのイヤやからな。

新聞集金人の草野出てくる。四五才を過ぎたくらいの中年女性。

草野 おはよう。朝から何の相談。ええ話やったら私も

まげてよ。

カナタ ああ、おはようございます。今日は早いですね。
草野 タベ集金した分、早よ持って来とかんと、今度の
大将うるさいから。大将いてはるやろか。

カナタ ええ、奥に。

草野 (小声で)なあ、シンさん死んだかて商売やめる
ことあれへんやんか。またバイトさしてよ。私口堅い
から絶対マズイことにはなれへん。請け合うわ。

カナタ もうやめましょ、その話。私は最初からお金取
って取引するの、イヤやったんですから。

草野 わかってるやんか。シンさんがトシハル君、一生
困らんようにいうことで、あの子にお金残すために流
してたんやろ。それは私もわかってる。そやから、今
度もそれは変えんとこ。あんたがトシハル君のために、
売れた分で通帳作ったらええやんか。なあ、お客さん
困ってんねん。いっぺんあの味知ったら、止められへ
んいうの、あんたもわかってるやろ。

ユキエ 草野さん、さよなら。またダンナさんにウチに
飲みに来るように言うといてよ。

草野 ちよつとユキエちゃん。あんた気いつけよ。シン
さん殺したん、あんたとちやうかいいうて噂になつて
るで。

ユキエ ……どこで。

草野　うちの亭主が飲み友達から聞いてきたらしいんやけどな。あんたとこの店、借金で首回らへんようになってるから、シンさんの金目当てに、やってしもたんちやうかい話らしいわ。

ユキエ　そう。まあそんな噂が出るうちが華やわ。そんな噂でも出てるうちは、まだお客さんうちに来てくれるいうことやからな。

草野　気にせんとときや。そんな噂に負けたらあかんのよ。ユキエ　ありがとう。またそんな噂聞いたら教えてな。ほな。

草野　：：：ユキエちゃん。うちの亭主今度飲みに行ったら早よ帰るように言うたって。女房相手に家で飲んでたら安上がる言うて。

ユキエ　草野さん。ダンナさんにツケ溜まつてる言うていてくれる？　早よ払ってもらわんと、ほんまに手え後ろに回るようなことせんとあかんようになるわ。(去る)

草野　カナちゃん。ホンマのとこどうやの。シンさんやったんは、ユキエちゃんなんか。それともクスリのやり過ぎでああなつてしもたんか。

カナタ　草野さん、さっきの話ですけど、とにかく、もうレボリユーションを売るのはやめましょ。あれは

草野　そんなん言うても、お客さん困ってはんねん。集

金いっても、あれ出してくれへんと新聞代払わん言われて、私もえらい困ってんねん。

野呂、奥の間から出て来る。

野呂（写真を持って出てくる。草野と目が合い、顔を背ける）

草野 あれ、あんた昨日の？　ちよつと、ちがう？　そうやんなあ。いやあ、ちよつと。取材の続き？　で、昨日、ユキエちゃんの店行ってみた？

野呂 え、いやあ、まあ。

草野 どうやった？　真相はわかった？　あの子も商売柄、人さばくのうまいからなかなか口割らんかったやろ。あ、昨日はパフェごちそうさん。

野呂 ああ、いえいえ、どういたしまして。

カナタ（野呂に）へえ、楽しそうなお仕事やってらっしゃるんですねえ。ここの見習いは、副業ですか。

野呂 まあ、そういうことになりますか。

草野 あ、ちよつと何それ。写真？　ちよつと見せてみ。何かユキエちゃんと関係あるの？

野呂 いや、これは別に。

草野（引ったくって）これ、ここの前で撮ってんねんなあ。シンさんめかしこんで、ええ男に写ってるわ。

……これ、何年くらい前の写真？　まだシンさんの髪黒々してるけど。

野呂　あの、オバちゃんはずっとここで集金の仕事してはるんですか。

草野　ちよっとオバちゃんはやめてよ。もう何も教えたげへんよ。

野呂　すみません、オネエさん。

草野　まあ、そこまで言わんでええけど。

野呂　ええっと、草野さん……でしたっけ。

草野　はいはい。

野呂　これ裏に昭和五三年元旦て書いてあるんですけど、

この頃は……。

草野　五三年いうたら……十五年くらい前やね。ちよ
うど私、下の子が生まれてたいへんやったわ。亭主の
稼ぎもすくなかったしなあ……。

野呂　いや、新聞代の集金はこの頃はやってなかったん
ですか。

草野　ああ。私一昨年からやから。

野呂　あの、この左から三人目の子、誰かに似てると思
いませんか。

草野　ええ、どれどれ。

カナタ　（のぞきこんで）あこれ、これトムラさんや

ね。

草野 ああ、ホンマやわ。あの人童顔やからあんまり変わってはいへんわ。

カナタ これをあなたやっつけて言うの。

野呂 そうなんです。

草野 ちよつとどういうこと？

野呂 いや、今の店長のトムラさん、多分中学の時、ここで配達してたんですわ。

草野 そうとちごて、何でこのトムラさんがあんたなん？

カナタ (腰を上げて) さあ、そろそろ花に水やらんと。

草野 ちよつと、どういうことよ。

カナタ 草野さん、トシ君が帰って来たなら、私お店にいるからって言って下さい。カブト虫ちゃんと見てるからって。

草野 ああ、トシハル君配達に行ってるの。

カナタ ええ。じゃあ私行きます。

野呂 あの、カブト虫、僕が預かるときましょか。もうちよつといてますし。

カナタ 知らない人に預かってもうたら、私が後で叱られますから。

草野 何？ 今度はトシハル君、それ持ち歩いてるの？ 前のゲジゲジ虫は？

野呂 ゲシゲジ虫？

草野 前まではタワシ持ってたんよ。私それで顔こすられて、顔面血だらけになったことあんねん。

カナタ きっと親愛の印やったんですよ。

草野 まあ、石鹼箱くらいやったら預かっといたげよか。タワシは見るのもいややけど。

カナタ そうですか。じゃあ、お願いします。

草野 なあカナちゃん。さっきのバイトの話、考えといてよ。

カナタ ……奥にいるシンさんに聞いてみたらどうです？

草野 ええ？ ちよつとどういうこと。カナちゃん。

カナタ、扉に消える。

野呂 あの、草野さん。その石鹼箱ちよつと貸してもらえませんか。

草野 (渡す) 変なことせんといてや。あの子怒ったら怖いねんから。

野呂 (箱を振ったりしながら) あのトシハルいう子は、どっか施設に入ってるんですか。

草野 いや、そういう話もあったらしいんやけどな、シンさんが預けさせへんかったらしいんよ。あの子、小

さいうちに親死んでしもて、ほんまにかわいそうな子や。

野呂 今はこの近くに？

草野 二丁目の風呂屋に預けられてるわ。何か遠い親戚筋らしいんやけど。

野呂 (フタをとる) ……。

草野 何それ。

野呂 何ですかね。

草野 いや、……それ骨とちがうの。

野呂 ええ、そうみたいです。

草野 気持ち悪。早よしもてよ。

野呂 (ポケットに入れ、代わりにライターをコトリと入れる)

草野 何すんのよ。そんなんしたらあかんやんか。

野呂 あの、その風呂屋いうのどこですかね。

草野 ちよつと、ちゃんと戻しとかんと、あの子怒るやんか。

野呂 まあまあ。(と、財布から札を出して草野のポケットへ)

草野 ちよつとそういう事とちごて。

野呂 それで子供さんに土産でも。……風呂屋、どこですかね。

草野 ……。こっちから大通り出たらすぐわかるわ。

大きい煙突見えるから。

野呂 ありがとう。

トムラ (出て来る) ああ、君、写真持ってどこ行ったんか思ったら、草野さんに見てもうとったんかいな。

草野 あ、おはようございます。

野呂 (草野に) 後、任した。(去る)

草野 え？

トムラ ちよつと君、どこ行くの。

トシハル、出会い頭に野呂とぶつかる。

トシハル ……イタイ。イタイ。

野呂 おう、君のこともちゃんと書くからな。(去る)

トシハル イタイ……イタイ。

トムラ トシハル、どこ打ったんや。ひざか、足捻れへんかったか。

トシハル (トムラから離れる)

草野 トシハル君、何か怖い。新しい店長さんやろ。トムラ 新しい店長で、草野さん、トシハルにややこしいこと言うたらあかんやんか。

草野 は？

トシハル オバちゃん……リリ……リリ……リリ……
……イタイ、イタイ……

草野　ちがうやろ。痛かったんはトシハル君やろ。

トシハル　（大声で）ゴロ！　ゴロ！　リリ、リリ
イタイ、イタイ。

リリ出て来る。おなかを押さえ息が切れている。

リリ　トシハル、ありがとうな。ゴロ呼んでくれてんね
んな。

トシハル　うん。ゴロー　ゴロー

トムラ　リリ、どないしたんや。産まれるんか。

リリ　触らんといて。トムさん、お父ちゃんのまね止め
えや。お父ちゃんは死んだんや。うち、産むんや。

トムラ　（突然呆然となる）

トシハル　（混乱して、カブト虫を持っていない不安
にかられる）カブト虫、カブト虫。

草野　トシハル君、これやな。おばちゃん、カナちゃん
から預かってたんや。

トシハル　カブト虫。（リリの耳元でカタカタと振って
やる）リリ、イタイイタイか？　リリ、シンボウし、
シンボウし。

リリ　ありがとうな、トシハル。でも病気やないからな。
トシハル　うん。シンボウし、シンボウし。

ゴロ　（出て来る）リリ、どないしたんや。

リリ　な、今日やったやろゴロ。もうじきヤヤ子出てくるで。

ゴロ　俺、お前おれへんから捜しとったんや。ぬくぬくのゆで卵、食べさしたる思てな。そやけど冷めてしもた。

トシハル　（カタカタと鳴る音が違うのに気付きフタを取る）あー。ニセモン、ニセモンや。（ライターを見る。ゆで卵を見る。突然ゆで卵を取りモグモグする）
草野　リリちゃん。とにかくお医者呼んでこよか。サナダ先生すぐ呼んでくるから。

リリ　人間の医者はいらん。

草野　何言うてんの、あの先生は名医やで。

リリ　ふん。あいつユキエにたらしこまれて偽の死亡診断書書いたいう話やんか。そんな奴、ヤブに決まってる。イタタタタ……。

ゴロ　リリ、しつかりせえ。

トシハル　オバちゃん、カブト虫、カブト虫。（手を出しモグモグしながら迫る）

草野　おばちゃんは何もしてへんよ。

トシハル　（奇声を発する）

草野　トシハル君、待って。あのヒゲのオツチャンがカブト虫持っていたんや。

トシハル　ヒゲ、のオツチャン………。

草野 そうや、さっきぶつかつたやろ。

トシハル ヒゲ、ヒゲ、カイズクや！ ワルモンや！

（怒りが込み上げる）

草野 あんたのどこ行ったで。お風呂屋さん行く言うてた。

トシハル （奇声を発し、去る）

ゴロ リリ、立てるか。どっか暖かいところに座つとかんと。

リリ うち、押し入れで産む。あそこが一番落ち着くんや。押し入れ連れてつて。

草野 大将、ここ毛布とかタオルとかようけありました？

トムラ （何かブツブツつぶやいている）

ゴロ おばちゃん、早よ持ってきて。

草野 誰がおばちゃんやの。

ゴロ そんなこと言うてる場合とちがうやろ。オネエチヤン。

草野 まあ、そこまで言わんでええけど。

ゴロ 早よ頼むわ。

草野 よっしゃ。すぐ持ってきたるわ。あ、あんた、男でわからんやろからな、ちよっとカナちゃん呼んで見てもらい。（去る）

ゴロ わかった。（奥へリリを連れて行く）リリ、ここ

上がれるか。

トムラ おい、犬が勝手に上がりこんだらあかんやろ。
タタミ汚れるやないか。

ゴロ やかましい。ドケチ。お前には血も涙もないんか。
トムラ (ゴロに答えず) ……兄弟やんか。これから子が産まれてくんねんで。そんなつれないこと言わないな。

ゴロ (キョトンとするが、状況に迫られて奥へ)

トムラ そやかて大将、床汚れたらかないませんわ。拭き掃除せなあきません。……あいな、リリは僕の子産むねんからな、大目に見てやって。何や君、リリにシットしてんのか。……大将、何で僕がシットするんですか。僕、あんなんされんのホンマは嬉しくないんです。(ゴロ、花屋へ駆けていく)

……まあまあ、まあまあ、そんな大きい声出さんでも。僕は君のこともリリのこと好きなんやで。リリは僕の気持ちわかってくれたから、おなか大きくなったんや。君も僕の気持ち、受け入れてくれたらええのに。……大将やめて下さい。僕、大将のこと尊敬します。でも、僕はいやなんです。……君はまだ若いから、いろんな事が見えてへんだけや。君もだんだんにわかってくる。……すんません大将、僕ダメなんです。君、僕のこと嫌いか。……そんな

こと言うてへんやないですか。……そしたらわかつてくてもええやろ。……僕辛いです。僕、普通なんです。クラスに好きな子おるんです。僕は大将のこ
と好きです。でも、ちがうんです。大将。大将。

ゴロ、奥へ駆け込む。カナタ、トムラのそばに立ち止まり、小さなカプセルを差し出す。

トムラ (我に帰り) カナタさん……。

カナタ レボリユーション。

暗転。

II

新聞屋に明かりが灯る。店の前をソワソワと歩き回るゴロ。草野が奥のカウンターで集金した金を数えている。トシハルは床に座り込んで新聞広告の切り抜きに没頭している。手にした大きいハサミは花屋で使われている物だろう。ユリはベースの弦を張り替え、サツコは鼻歌を歌っている。店内の時計が夜の十時半を告げた。

草野 ちよつとゴロちゃん、落ち着いたら。あんた見てるとこつちまでソワソワしてきて、お金の計算合わんようになるわ。

ゴロ 遅い、遅すぎる。こんな時間かかるもんなんか。草野 そういうもんや。遅い人もあれば、早い人もある。ゴロ リリは犬やで。安産のはずやのに。

ミツル、風呂桶を手に、首に手拭い、戻って来る。

ミツル ああ、ええ風呂やった。ただいま。

草野 お帰り。

ミツル どうも遅うまでご苦労さんです。

草野 ホンマにご苦労さんやわ。最近、夜取りに來い言うところ多いからいつまでたっても片付かへん。

サツコ ミツル君、邪魔してるわ。

ユリ こんばんわ。

ミツル おう、どうもどうも。さあ、湯冷めするとあかんから、僕寝よかな。

ゴロ おい、奥入ったらあかん。男は立ち入り禁止や。ミツル 何や、ほな僕今晚どこで寝たらええねん。

奥でリリの呻き声。

ゴロ　リリ、がんばれよ。(歌を歌う)レボリューション、それは遠い日のイリュージョン……

ミツル　歌うな。今晚うなされそうや。

トシハル　……レボルーション……レボルーション……

サツコ　(トシハルに)なあ、何作ってんの。

トシハル　レーボリューション。

サツコ　(作品を見て)へえ、芸術的革命やね。

ミツル　うん、爆発してるわ。

トシハル　(別の一つを取り)リリ。(また一つ)オッチャン。(もう一つ)　コドモ。(さらに一つ)ゴロ。

ゴロ　おう、そのコドモいうの、もうちよっと上手に作ってくれや。不安になるやろ。

サツコ　何だよ。すごいやん、これ。

ゴロ　ちよっと俺に貸してみい。

トシハル　アー。(怒る)

草野　ちよっと静かにしてよ。お金合わへんやろ。

静かになる。リリの呻き声。

ユリ　マユ遅いと思わへん。どないしたんやろ。

サッコ 打ち合わせ長引いてるんやろ。あのディレクター、完全主義者やから。

ユリ うん。……（ポツリと）最近、弦よう切れるわ。サッコ ガンガン引きすぎなんちゃう。普通切れへんでベースの弦。

ユリ ちよつと、また蒸し返す気？

サッコ ごめん。……ガム食べる？

トシハル タベル、ガムタベル。（取る）

サッコ ハハッ、一枚しかなかった。

ミツル リョウタ君はまだ練習中か。

サッコ うん。もう他の子らみんな、ここ通ったんやけ

どな。あの子だけ残って練習やってんのとちがう？

まだ時間あるし。

ミツル ふーん。みんな熱心やな。

ユリ なあ、ミツル君はずーっと新聞屋やっていくの。

ミツル え、何で。

ユリ いや、夢とかヴィジョンとかないんかなと思って。

ミツル ないなあ。十時に寝て、起きて、朝刊配って、テレビ見て、昼寝して、起きて夕刊配って、そんだけや。

ユリ それって淋しくない。

ミツル うん、ちよつとな。店任されるようになったら、張りもちがうんやろうけど。ちよつとだけ自分らとか、

リョウタ君とか、うらやましいけどな。

ゴロ 俺のこともうらやましがれよ。一児の父親になるんや。

サツコ それってレボリユーションやな。

ゴロ そや。(歌う)レボリユーション、それは遠い日の

サツコ (制して)ありがとう。私の歌気にいってくれて。

ミツル なあ、自分らのその歌って………クスリの歌か。

サツコ ああ、まあ、そうと取れるな。よう言われたりするけど。

ミツル やっぱり自分らミュージシャンやし。やってたりすんの。最近噂の「レボリユーション」いうやつ。

サツコ 私らは別に、そんなんなあ。

ユリ うん。まあ機会があったら、やってもええと思ってるけど。

ミツル 何や、いつもテンション高いから、やってるんや思ってたのに。

サツコ 私らは天然や。なあ。

ユリ うん。(ふと時計に目をとめ)マユ、遅いなあ。サツコ 何言うてんの。昨日二時間も遅れて来たくせに。

ミツル 何かな、割りと簡単に手に入るらしいで。

サッコ 何が。

ミツル いや、さっきの話の。

草野 ちよつと、それどこで聞いてきたん。

ミツル えっ、いや、風呂屋でな、オッサンらがしゃべってたんや。

草野 風呂屋で、トシハル君とこの？

ミツル いや、麦の湯は何か閉まってたから、駅の反対側の何とか温泉まで行ってきた。

草野 日の出温泉？

ミツル うん。

草野 それで。

ミツル その客が言うには、その「レボリューション」
いうクスリがらみの事件が麦の湯であつたから、閉ま
ってるって。

ユリ この子んとこのお風呂屋さんが？

ミツル そうそう。

サッコ トシハル君、あんた帰らんでええのん。

トシハル リリ産むまでここおる。

ゴロ 遅いなあ、ちよつと見て来る。

カナタ （奥から顔を出す）もうちよつとやかからね、ゴ
ロちゃん。リリちゃんがんばってるから、待ってて。

（引つ込む）

ゴロ ……ああ、もう、早よ何とかならんかなあ。

トシハル　ゴロ、オツチャン、リリ、コドモ。

マユ、やって来る。

マユ　みんな、お待たせ。

サッコ　ああ、やっぱり打ち合わせ長引いた？

マユ　：：：まいった。

ユリ　どうしたん。：：：ちよつと。

マユ　私ら明日、バツキングの録りやんなあ。

サッコ　何。：：：何かマズい話になってるんか。

マユ　私ら、C D出るんやんなあ。

ユリ　ちよつと、落ち着きいよ。どうしたんよ。

マユ　今日、待ち合わせの場所に来うへんかったんよ。

私らの録りの段取りしてくれたディレクター。

サッコ　会社に電話してみた？

マユ　うん。してみた。

サッコ　ほんでどうやったん。

マユ　使われてへんねん。

ユリ　何が？

マユ　電話がやんか。

ユリ　何ですよ。

マユ　私、そやから行ってみてん。そしたら、：：：：：な
かった。

サッコ 何がよ。

マユ 会社がやんか。

サッコ ちよつと、会社ごとトンズラされたんか。

マユ ちがうよ。私らメジャーからデビューすんねんで。

昨日まで事務所もスタジオもあつたやんか。

ユリ 消えてなくなった言うの。

マユ 別のビルに変わつてた。

ユリ 別のビルで。

マユ 普通の生命保険会社のビル。ネクタイ締めた人らが仕事してた。

サッコ あんた、降りる駅まちがえたんちがうか。

マユ 私、そこまで間抜けてるか。

ユリ とにかくもういつペン電話してみたら。

マユ 何べんもしたよ。二十回はした。

サッコ 私してみるわ。

マユ 一緒やて。私の言うこと信じてへんやろ。

サッコ そうやないけど。………ミツル君、電話借りる。

ミツル おう、どうぞ。

サッコ 何番やった。

マユ もういやほど回したから覚えてる。(回す)

ユリ もつとゆつくり回しいや。まちがえんように。

サッコ かかった。

マユ 嘘。

サツコ ……もしもし。

トシハル はい、もしもし……コドモです。

サツコ はっ？

トシハル はい、もうじき出ます。

サツコ いえ、ごめんなさい、まちがえました。

トシハル マットツテヤ。

サツコ (切る)

ユリ どこかかった？

サツコ テレクラ……やと思う。あんた頭パニックつてて、いらん番号回してしもたんちゃう。

マユ アホな、ちゃんと回したよ。(手帳を出し)ほら。

ユリ 貸して。私がするわ。(回す)……かかった。

……あ、もしもし。

トシハル はい、むらなかしんぶんてん。

ユリ あかん、留守電やわ。

マユ どの？

ユリ 区役所やって……何かメッセージ入れとく？

トシハル (突然受話器を取って) レボリユーシヨ

ン……レボリユーシヨン。

サツコ まるで、脅迫電話やな。

草野 トシハル君、お姉ちゃんらの邪魔したらあかんよ。

トシハル ゴロ、ゴロ、コドモ、もうじきや言うてるで。

ゴロ（受話器を取り）どれ………アホ、何も聞こえ
へんやないか。（切る）

ミツル あのマユちゃん、今の話、僕は信じるよ。

マユ ありがとう。だってホンマなんやもん。

ミツル 実は、僕も思い当たるふしがあんねん。

サツコ ……：…：…：…：…：…：…

ミツル いや、ちがうかもしれへん。

マユ ええやん、言い。

ミツル うん。今日の昼間な、苦情の電話ぎょうさんあ
ってな。

草野 ああ、それはトシハル君があんたらの配った分、
持ってきたからちがうの。

ミツル それはカナタさんに聞いて、すぐに持っていつ
たんやけど、それ以外に十本以上電話あったんや。そ
れも配り違いの苦情で。

サツコ どういうことよ。

ミツル 僕とリョウタ君が、うちの新聞取ってないところ
に入れてしもてたんや。

ユリ それって、この子がまちがえて入れたんちゃうの。
草野 トシハル君はまちがえへんよ。いっつも完璧や。

ミツル この人が戻ってきた後は、トムさんが引き継い
で配ったし、僕らプロやから、そうそうまちがわへん。

……：…：…：…：…：…：…

や。

ユリ　そんなに、たくさん？

ミツル　うん、多分。

リョウタ　出て来る。ニタニタしている。

ミツル　ああ、リョウタ君。今、今日の昼間の話してた
んやけど……

リョウタ　（突然笑いが込み上げる）最高や。俺、多分
天才や。急にギターすごいまなつてしもた。（笑っ
てる）

草野　リョウタ君、ちよつと、あんた、どうしたん。

リョウタ　ごめん、草野のオバチャン。今日スタジオ代
なかったからさ、ちよつと集金袋から借りたんや。

……今、返すから。（新聞を切り始める）

草野　なあ、その後でええし、……（カプセルを出し）
これ飲んだんか？

リョウタ　（新聞の切ったものを渡す）はいお金。これ
ぐらいあつたら足りる？（高笑い）

ミツル　草野さん、その薬、もしかして……

草野　あ、……これは風邪薬。……私帰るわ。そろ
そろ亭主帰る時間やし。（去る）

ミツル　ああ、草野さん、集金袋！

リヨウタ ミツル君、気にするな。金はいくらでもある。
ホラッ。

ユリ ちよつとリヨウちゃん、何か楽しそうやけど、大丈夫か。

リヨウタ ユリちゃん、ベース教えたるか。(ベースを取る) これからのベースは早弾きの時代や。ベースチヨーキング!

トシハル (リヨウタをまねて、お金を切る) オカネ、オカネ。(とぼらまく)

リヨウタ ゴロ、おまえ歌えよ。

ゴロ アホ、こんなときに浮かれてる場合か。

マユ おかしい、何かちがつてる。

サツコ リヨウちゃん、ベースもうええわ。あんたがうまいのはわかったし。

リヨウタ なあ、サツコちゃん、俺とサツコちゃん、どっちがギターうまいと思う。

サツコ えっ。

リヨウタ 俺、リードギターでメンバーに入ったるわ。ぜったい売れるって。

ユリ リヨウちゃん、私ら今、そういう場合とちがうねん。

ミツル リヨウタ君、明日の配達大丈夫か。

リヨウタ ミツル君、俺はこの子らとデビューするんや。

ウォー、いよいよ明日が見えてきたぞ。

マユ　いよいよ。T O M O R R O W　N E V E R　K N
W S E やわ。

ユキエ、路地から出て来る。

ユキエ　ちよつと、カナちゃん来てない。

ゴロ　ああ、奥でリリの面倒みてくれてるけど。何、
ユキエ　トムラさんの様子がおかしいねん。誰か来ても

らわれへんやろか。

ゴロ　誰かて、俺はここ離れられへん。

ミツル　トムさん、どこに居てはるんですか。

ユキエ　うちの店来てはるんやけど、あんたでええわ。

ちよつと来て。

ミツル　俺、ちよつと行ってくる。リョウタ君のこと頼
んだで。

ユリ　ちよつと、ミツル君。

サツコ　頼んだでって言われてもなあ。

リリの呻き声、一際高く。

カナタ、出て来る。

カナタ　ゴロちゃん、生まれたよ。トシ君も、もう奥入

ってもいいよ。

トシハル　リリ、リリ、レボルーション、生まれた。

ゴロ　待ったでえ、待ちくたびれたでえ、カナちゃん、
どんな子や、男か、女か。

カナタ　自分の目で見たらええわ。ゴロちゃん、早よ奥
入り。

ゴロ、トシハル奥へ。そのとき花屋の扉が開き、
野呂が出て来る。

カナタ　みんなもどうぞ。

マユ　ありがとう。でも私ら、今ちよつと混乱してるか
ら。

サッコ　うん。せっかく子供生まれたのに、私ら、その
子にニッコリ笑いかける余裕ないし。

ユリ　そやな。ちよつと眉間にシワ入ってるかもな。

カナタ　そう、じゃあ今度ね。(奥へ)

サッコ　どうする、マユ。

マユ　：：：どっちにしても、明日にならんと身動きと
れへんなあ。

サッコ　でも、何をどうしたらええんよ。

ユリ　もう一回電話してみよか。

マユ　何回したって一緒や。

リヨウタ　（空を見上げている）あっ、虹や、虹が出てる。

サツコ　ちよつとりヨウちゃん、しつかりしいよ。

マユ　：：：ホンマやわ。何やる、あの光。

ユリ　オーロラ：：：まさかなあ。

サツコ　：：：レボリューション、：：：あの手紙や。

マユ　何？

サツコ　なあ、あの人、花屋の人やんなあ。

マユ　さっきの人？

サツコ　うん、あの曲の詩な、先週雨の降ってた朝、拾ってん。

マユ　あの曲で、レボリューションか。

サツコ　そう。

マユ　どこだよ。

サツコ　そこの花屋のプランターとか積み上げてあるとこで。

ユリ　ひよつとして盗作？

サツコ　ちがうよ。通り掛かったら手紙が落ちててん。

インク雨に滲んでて：：：。

野呂　（読みつつ）私は、やはりあの遠い麦畑を目指そうと思います。私は信ずるもののために戦い、その戦いの向こうに、七色の虹がかかるのを見ました。

リヨウタ　ああ、どんどん色が変わる。むちゃくちゃ奇

麗や。

サツコ そう、その手紙。

マユ あんた、今朝の……。

野呂 レポリューションか、なるほどな。あんたらも、

あのクスリやってたんか。

サツコ あの、その手紙どこで？

野呂 その花屋でな、今失敬してきた。この手紙の受

取人は、あのカナタっていう女やったわけや。(見上げ)どこに虹がかかってるって。

ユリ 見えへんの。ホラ、この指の先、真っすぐのそこ。

野呂 幻やな。俺には見えへん。あんたらがレポリューションやってるから見えるんやろ。

マユ ちよつと何が言いたいの。

野呂 レポリューションの出所はこの花屋や。あんたらここで直接、手に入れてるんやろ。

ユリ あんた、何が言いたいのよ。

野呂 あんたら、デビューするとか何とか言うてるけど、それもあんたらの見てる夢とちがうんか。

マユ なあ、何か知ってるんやったら教えて。私らが契約したレコード会社、なくなってもたんや。あれ、

何で？

野呂 花屋の女、ここにいてるよな。

マユ なあ、私らレポリューションなんて使ってない。

リョウタ（野呂に）おい、あんたも見てみい、あの虹、
どんだん色が変わる。

野呂 見えへんもんは、いくら見ても見えへん。夜に虹
はかからんもんや。

サツコ マユ、もうすぐ十一時やで。

マユ えっ？

サツコ スタジオ入る時間やんか。

マユ ……：…：…：…：そうやな。

ユリ =T O M O R R O W N E V E R K N O W S =

……：…：私らの名前か。

ユリ 明日のこと見えへん分、明日に何か残しとくんや
ろ。私ら、幻なんか見てない。虹は見えてもな。

マユ =T O M O R R O W N E V E R K N O W S =。

サツコ 明日になったら何か見えるよ。

マユ ……：…：なあ、あんた。

野呂 俺か。

マユ 夢見てるのは、あんたかもしれんで。レボリユ一
ションのせいじゃなく、確かに何かが変わってるんや。

……：…：行こ。

リョウタ おい、待ってくれ。俺もまぜてくれんのやろ。
サツコ リョウちゃん、もうちよつと練習してからおい
で。ギターの腕、今はあんたより私のほうが上や。

（三人、去る）

野呂 （空を見ている）あ、流れ星や。

リョウタ 流れ星？ あれは虹や。虹が流れてるんや。

クソー。俺はあの虹つかんだる。（ジャンプする）

カナタ （見ていた）幸せそうやね、リョウタ君。

リョウタ ああ、カナタさん。あそこ、見えますよね、

あの虹。

カナタ ええ、見えるわ。

野呂 やあ、どうも、カナタさん。

カナタ いい夜ですね。こんな夜は外にいても、寒さが苦になりませんね。

野呂 あの……この手紙、シンさんがあなたにあてた、遺書みたいなものですか。

カナタ あら、あなた作家も副業やっただですか。本職は泥棒？

野呂 作家も泥棒のうちですわ。この手紙のついでにカナタさん、あなたの秘密も覗かせてもらいました。塀の向こうの麦畑。おまけにそれをレボリューションにする、ちよつとした細工。

カナタ 言うてくれたらお見せしたのに。別に私、隠してたわけじゃありませんし。

野呂 俺、自分で探したかったんですわ。まあ、趣味いうやつですか。今日の昼間、あの風呂屋へも行って来ましたし。

カナタ 何かわかりました？

野呂 ええ、だいたいは。

トシハル （奥より出る）ヒカリ………ヒカリ。

カナタ ああ、あれ。きれいな光りやね、トシ君。

トシハル ちゃう、ここおる。ヒカリ。

カナタ えっ？ ああ、ほんと。

リリ ヒカリ。ああ、ホンマにこの子は歩くの早いなあ、さつき生まれて、すぐに立ったと思たら、もう歩き出した。ゴロ、ヒカリが勝手にどっか行かんように、よう見といてな。うち、まだ体が思うように動かへんから。

ゴロ お、おう。（出て来る）

リリ あ、今カウンターの下入った。ホンマにやんちゃやなあ、この子は。

ゴロ オ、オイ、………ヒカリ、そんなところ行ったらあかん。早よ出て来い。

野呂 おい、犬、ほんまに何か見えてんのか。

ゴロ おう………当たり前や。どこに自分の子供わからん親がいてんねん。なあ、ヒカリ。（と、カウンターの下に話しかける）

リヨウタ （顔を押しさえ）イタタタタ………

リリ こら、ヒカリ。そんなんしたらダメ。

リヨウタ 痛かったあ………すごい力やな。ちゃんと見

といてくれや。

カナタ（抱き上げ）はい、ヒカリ君、お母さんのところへ行こな。

トシハル ヒカリ、ヒカリ。

リリ カナちゃん、トシハルにも抱かしてやって。名前付けてくれたん、トシハルやねん。

カナタ はい、トシ君。しっかり抱きや。落とさんように。

トシハル ベロベロ、バー。

野呂 おい犬、あれ何なんや。

ゴロ 俺の子や、悪いか。

野呂 ホンマは何にも生まれへんかったんちがうか。単なる想像妊娠とか。

ゴロ 何でや、確かに俺の子や。

野呂 お前に似てるか、その子供。

トシハル オツチャン、ゴロ、ニテル、ワロテル。

ゴロ リリ、それ俺の子やんな。

リリ そうや、うちとあんたの子や。大事に育てよな。

ゴロ 見てみい。リリと俺は犬同士や。人と犬の間に子供生まれるかい。

野呂 それ、誰や、そのヒトって。

ゴロ ……。

野呂 知ったったんやろ。前の店長があのだのこと、ネ

コかわいがりしとったん。お前関係あんの知とったんやろ。

ゴロ お前、何が言いたいねん。

野呂 でも、まあ、気にするな。その子供はどこにも生まれてないんやからな。ここにいてんのは幻や。

ゴロ ヒカリ、ヒカリ、どこや。お父ちゃんに姿見せてみい。

カナタ あなたなにをしたいんですか。

野呂 ああ、僕のこととはどうか気にせんといて下さい。僕は犯罪や、人と人の裏を見るのが好きな、単なる作家ですから。このことを本にしても、読む人はみんなフィクションやと思うでしょう。

リリ ゴロ、ヒカリ表へ出たわ。ヨチヨチ歩きやったのに、もう駆け出してる。

ゴロ リリ、ヒカリどこにいてんねん。この辺りか。

リリ あかん、あんたの手すりぬけて、通りに出て行った。ゴロ、大通り出たら危ないわ、車ようけ通るから。トシハル ヒカリ、ヒカリ、でたらあかん、ヒカルー。(かけて行く)

リリ ゴロ、早よ連れ戻さなあかん。………お願いや、うち走られへんねん。

ゴロ ……リリ、ホンマに俺の子やねんな。

野呂 そうそう、全部吐き出してあらわになるのは、奇

麗なことや。

リリ　うちとあんたで育てるんやろ。あんた、待っててくれたんやろ。……なあ、トシハルが名前付けてくれたんや。あの子はうちのヒカリなんやで。

ゴロ　（駆け出す）

カナタ　もう気が済んだでしょう。もう探すものはここにはないはずですよ。

野呂　まだまだ、あのユキエいう女と、トムラという店長、あいつらの裏を見るまでは、俺の目は冴えたままや。

カナタ　もう、おやすみなさい。

リョウタ　ああ、虹が降りて来た。もうちよつとで手届きそうや。空も地面も七色に輝いてる。

カナタ　あなたには見えへんですか。

野呂　俺にはいつもどおりの灰色の街しか見えへんなあ。

カナタ　淋しい、悲しい人ですね。

トムラ、ミツルに抱えられるように出て来る。

震えている。

ミツル　トムさん、しっかりして下さい。ミツル！言うて頭はって下さい。トムさん。

トムラ あかん。俺、怖いんや。また勝手に大将としゃべってしまいかもしれへん。

ミツル トムさん、トムさんはトムさんです。大丈夫ですから。とにかく布団敷きます。

カナタ トムラさん、怖がらないで顔を上げたらいいんです。

トムラ ……カナタさん。

リョウタ 村中さん、これ見えますか。虹ですわ。この辺り全体、虹に包まれています。

トムラ 俺はトムラや。

リョウタ ミツル君、見えるやろ。

ミツル ああ、……僕にも見えるわ。何か甘い香りまでする。

リョウタ (笑って) 天国や、天国が降って来た。

野呂 トムラさん、あんた村中さんの何を怖がってるんです。

トムラ ……何でそんなん聞くねん。

野呂 聞きたいからですわ。噂によると前の店長、昔から同性を愛する趣味があったそうですねえ。

トムラ ミツル、早よ布団敷いてくれ横になる。

野呂 待って下さいよ。俺、一週間もかけてあちこち聞いてまわったんですよ。最後にあんたの口から聞いたんです。昔、あんたが十二、三で、ここで配達して

るころ、大将に無理やり………

トムラ 勝手にしてくれ。作家か何かしらんけど、好きに思っていたらええ。

野呂 ほんでトムラさん、何であんたの中に、村中さん入り込んでるんですかねえ。あんた、ひよつとして、大将のこと愛してたんですか。死んだことがショックで、それで。

ミツル ええ加減にせえや。トムさん病気なんや。

野呂 その病気の引き金になったのは、タベカナタさんと試したレポリユーション？

ユキエ (聞いていた) カナちゃん、こいつ言うた通りやろ。とんでもない奴や。

野呂 やあ、ユキエさん。町金融で、ついに情報仕入れて来ましたよ。借金が何千万単位であるんですって。どっかの男に貢がされたんですか。

ユキエ お客さん、私も噂話は好きですけど、あんまり本人には聞かんもんとちがいます。それぞれの事情いろいろありますし。

野呂 事情で人殺したんですか。シンさんが売りさばいたレポリユーションのアガリ、借金の穴埋めにしようと思て。

ユキエ へえ、おもしろいなあ。そういう推理。それで手口は？

野呂 おそらくは睡眠薬でしょう。あるいは殺すつもりはなかったんかもしれん。飲みに来ていたシンさんのお酒にそれを混ぜた。そして、まんまと盗みを働いた。ところが量をまちがえて、哀れシンさんは昇天とあいなった。

ユキエ へえ、作家にでもなったら。あんた、売れるわ。野呂 俺、作家なんです。売れませんがね。でも今度の本は売れるでしょう。何と言ってもラストが陰惨極まりない。シンさんの甥っ子が住まわされてる風呂屋のボイラー室を使って、あんたがその死体を燃やすんですから。

トムラ ……今のホンマか。

野呂 ええ、九割九分まで。

カナタ 本当にそんなことが起こったんでしょか。

野呂 起こったんです。

カナタ あちこち聞いて回ったんですね。

野呂 ええ、それはもうたくさんの人に。

カナタ ……でも、そのボイラー室で燃やされていたのが、レポリユーションだったら？

野呂 何が言いたいんですか。

カナタ トシハル君、毎日うちの店から麦の穂を持ち帰ってました。少しずつ。

野呂 ええ、それで。

カナタ あの子、それをボイラーで燃やしてたんじゃないかしら。……毎日、少しずつ。……あなたにはこの虹が見えませんか。

野呂 見えへんなあ。

カナタ 本当ですか。

野呂 ほな、仮に見えたでしょう。ほんで何が変わるんや。俺は調べたんや。

カナタ 答えた人たちもレボリユーションの中にいるんです。煙突から吹き上げられた煙が、空気の中に虹を作り、空に届いたレボリユーションは先週の雨の日、街に降りてきたんです。

ユキエ ……あんだ、ほんまに作家なんか。

トムラ 口から出まかせ並べて、俺らから金取ろうとしてるヤクザもんやろ。

野呂 ちがう。俺はライターや。

リョウタ ああ、風呂屋の煙突が七色の煙吹き上げてる。リリ あ、ヒカリ。ここや。早よこっちおいで。

路地から光り。

ユキエ すごい、輝いてる。

野呂 嘘つけ。

トムラ 大将、どこ行ってはったんですか。俺辛かった

んですわ。

野呂 あんたは病気なんや。

リヨウタ まぶしい、目開いてられへん。

野呂 俺の目は光りなんか感じへん。

ミツル 朝や、朝の光りよりまぶしい。

カナタ あなたも幸せになれるはずです。

野呂 おめでたいのはあんたらや。この裏通りで起こつ

たことは、全部ほんまにあつたことや。

リリ ヒカリ、こっちおいで。その人はちがう。ヒカリ
を見るのができひん人なんや。

野呂 (目を据え) ここか。ここにおんのんか。(と、
足を高く上げ、踏みつけようとする)

カナタ やめなさい。その子はあなたに見てほしいんで
す。

リリ ヒカリ、ここや、こっちおいで。

野呂 こいつが消えんと、俺が調べたこと全部、嘘にさ
れてしまう。ここか、ここか、ここか。

まわりをメチャクチャに踏みつける。トシハル、
路地から出る。ハサミを取り、野呂の背中に突
き立てる。

野呂 何……の、つもりや。

トシハル ヒカリ：：：：はボク。リリ、ゴロ、オツチ
ヤン、みんな：：：カブト虫、飛んでった。

リリ ヒカリ、ヒカリ、どこや。どこにいてんのや。

ゴロ （ヒカリらしい塊を抱き、路地から出てくる）
リリ。ヒカリ、ここにおったで。

野呂 （胸ポケットからさっきの手紙。崩れ落ちながら）
なあ、前の店長からの手紙、これ遺書なんか。その可
能性もあるやろ。レボリユーションのやり過ぎで命落
としたんとちがうんか。：：：：なあ。

カナタ もう、おやすみなさい。

野呂 これ、レボリユーションの幻やろ。：：：この手
紙：：：。

トシハル （たどたどしく手紙を読む）私は、やはり
あの遠い麦畑を目指すのだと思います。私は信ずる
もののために戦い、その戦いの向こうに、七色の虹
が輝いているのを見ました。しかし、雨上がりの虹
は、はかなくも消え去り、そのかわりに、私の肩に
は石が、重罪人に架せられた重い罪のようにのしか
かっているのです。背中の翼は、重みのせいで悲鳴
を上げ、傷付いた足は、もはや助走をつけて浮力を
得るためには動きません。：：：しかし、私は越え
て行きたいのです。また、いつか雨が降り、陽に輝
いて見える、あの、虹の彼方の麦畑へ。目の前に居

並ぶ盾をはねのけ、狙い定められた銃口が火を吹こ
うとも、私の信ずる者たちの住む、あの麦畑へ。

電話鳴る。

トムラ ……はい。村中新聞店。はい、……はい、
そうですか。……来週ですか。……わかりました。
……ええ、大丈夫です。(切る)

ミツル どっからですか。

トムラ 本社からや。次の店長決まったからな、別の店
行けいうことや。

ミツル ……えらい急な話ですね。

トムラ 人が足らんらしい。……どこもかしこも街の
様子が変わってる言うとった。あちこち全部、どこも
かしこもや。

暗転。

エピローグ

いつの日かの朝、新聞店の戸が一枚だけ開い
ている。旅支度を整えたトムラとミツル。

ミツル 遅いですね、新しい人。

トムラ もうじきやる。……ええ時間や。そろそろ出るか。向こうの引き継ぎ間に合わんようになる。

ミツル ここ、配達大丈夫ですかね。

トムラ 向こうもプロや。心配するな。

ミツル はあ、でも色々ありましたから。

トムラ 俺ら、ジプシーや。いちいちこだわってたら体いくつあっても足らへん。

ユキエ、スーツケースを持って出てくる。

ユキエ おはよう、……トムラさん。

トムラ ああ、どうも。大きい荷物ですね。

ユキエ お互いにね。……そこでタクシー拾うけど。途中まで乗ってく。

ミツル あ、どうもすいません。

トムラ ミツル、駅まで歩くぞ。ユキエさんに迷惑や。

ユキエ そんなん全然。……お互いもう会うこともないやろし、そんなに気ばらんでも。

トムラ あの……どっか遠いところ行かはるんですか。

ユキエ そう、ちよつと遠いところ。そちらは。

トムラ　すぐそこですわ。

ユキエ　そう。

トムラ　……あの、ユキエさん。

ユキエ　もうユキエの名前はやめてん。サチエが本名。

トムラ　……サチエさん。俺、情けない奴です。迷惑
かけました。

ユキエ　みんな大変やわ、いろいろ。もうすっかりええ
の？

トムラ　ええ、多分。

リヨウタ出てくる。

リヨウタ　おう、ミツル君、もう会われへんかと思った。

これ餞別がわりや。間に合ってよかった。

ミツル　リヨウタ君。何これ。

リヨウタ　（耳打ち）

ミツル　ええ？まずいわ、それは。あの時リヨウタ君、
そうとうひどかったんやから。

リヨウタ　ええから。いつかガツンと行きたい時まで取
つといたらええ。先は長いんやから。

トムラ　ミツル、何やそれ。

ミツル　なんでもないです。

トムラ　そしたら、リヨウタ君、新しい人もうじき来は

るから、あと頼んだで。世話になったな。

リヨウタ はい。トムラさんもお元気で。

ユキエ じゃ、私こっちから行きます。

トムラ そしたら、俺らこっちから。

ユキエ ……さよなら、シンさん。

トムラ (振り向き) いつか、どっかでユキエいう店見
付けたら行ってみますわ、サチエさん。(去る)

サッコ、マユ、ユリ出てくる。

サッコ おはよう、リヨウちゃん。

リヨウタ おう。T O M O R R O W N E V E R K N

O W S。明日、見えたか。

マユ リヨウちゃんの方はどうなんよ。

リヨウタ 毎日弾いてんで、ギター。

ユリ 私ら今度な、コンテストに出るねん。

リヨウタ へえ。「レボリューション」で出るんか。

サッコ 今度は新曲。「レ・ボリューション」いうねん。

マユ 再び、

ユリ 回転する。

サッコ また一からやり直しや。

マユ じゃあな、おやすみリヨウちゃん。

ユリ また練習ん時、遊びにおいでよ。セッションしよ。

リヨウタ サンキュー。暇なとき顔出す。

サツコ バイバイ、早起きロッカー。(三人去る)

リヨウタ さあ。仕事、仕事。

ゴロ おお、ここや、ここや。お母ちゃん早よしい。

リリ 待って。ヒカリ、シャツ出してしもてんのや。初

めての街やのにシャキッとせんとみっともないやろ。

リヨウタ おはようございます。

ゴロ どうもおはようさんです。これからお世話になり

ます。……あれ、お母ちゃん。ここにも犬について

るわ。

リリ ええ、またかいな。前のところにおったあの子ら、

何て言うたかいな。

ゴロ ゴロとリリや。

リリ そやそや。あんた名前何て言うの。

リヨウタ リヨウタです。

リリ まあ、立派な名前乗ってるわ。ちよっとヒカリ、

早よおいでや。

ヒカリ ハイ。シンブーン。チヨウカンです。

ゴロ それは配るときでええんや、な。リヨウタ、大将

どこ行った。

リヨウタ あの、今出ましたけど。何か急ぐいうことで。

ゴロ そうか。ちゃんと挨拶したかったのになあ。

リリ (店の中へ入る) あんた、ちゃんと今朝の分のチ

ラシ入れといてくれてはるわ。丁寧な人なんや。

ゴロ よっしゃ。ほな、配達に出よか。こないだ下見したから行けるな、ヒカリ。

ヒカリ うん。リョウタ連れて行く。

リリ そんなん、構てたら遅なんぞ。

リョウタ あの、俺どの区域配りましよう。

ゴロ あんたは犬やろ。そんなん無理や。ヒカリについて行き。ほな、行こか。

リリ ヒカリ、挨拶されたらちゃんと返事すんねんで。

ヒカリ はい。おはようございます。

ゴロ ほな、ヒカリはこの花屋からや。

ヒカリ はい。いってらっしゃい。

ゴロ はい、いってきます。

リリ ヒカリも気をつけて、いってらっしゃい。

ゴロ ああ、ええ朝や。

ヒカリ、花屋の扉をノックする。

ヒカリ おはようございます。チョウカンです。

カナタの声 ヒカリ君、やっと着きましたか。

ヒカリ はあ？

花屋の壁が開くと一面の麦畑。

野呂はパジャマ姿で座っている。そばにカナタの姿。

リョウタ あ、あんた。

ヒカリ おはようございます。チョウカンです。

野呂 ここが、あの麦畑か。

ヒカリ ゴクロウサン。ゴクロウサン。

カナタ (野呂の髪を撫で) おやすみ、レボリユーション。

ヒカリ キョウモアツナリソウデスナア。

新聞店では草野が集金の計算をしている。

何かが変わり、何も変わらない。

細い路地を風が吹き抜けた。

「OVER THE RAINBOW」流れて。
暗転。